



今回紹介する「語り部」さんは、江添良作さんです。
江添さんの父・久明さんは、イタイイタイ病対策協議会の副会長として、患者救済や裁判勝訴に尽力されました。
江添さんは、講話の中で父・久明さんの生涯を辿りながら、当時の時代背景や患者・家族の様子を伝えると共に、公害病の悲惨さとその教訓を後世に語り継いでいくことの必要性についてお話しされています。

『何を語り継ぐか』



江添良作 さん(66歳)

東日本大震災の前日に、父・久明は萩野病院で青島先生に看取られ85歳で亡くなりました。父の40年余りの半生は、裁判闘争と勝訴直後に三井金属との間で取り交わした2つの誓約書と1つの協定書の実現のために費やされた長い闘いの歴史でした。

私が語り部をしようと決意したのは、父の死後、今年で50周年を迎えるイタイイタイ病対策協議会の会合やイ病資料館の行事に参加して、「今もイ病は終わっていない」「風化させてはならない」「原因企業への立入調査の継続」

など、多くの関係者が真剣に取り組んでおられる姿を見るにつけ、傍観者でいいのかとの自責の念に駆られたからです。

また、父の遺品を整理していた際に出てきた『イ病運動40年余』と題した少年期から晩年に至る手記の最後に、「支えていただいた多くの皆様への深い感謝と、100年の公害から解放された安心の故郷と清き神通の流れが再び汚染することの無いよう祈るのみです。勝訴を聞かずに逝った第1次原告の母、それを支えた父、今は亡き妻に感謝し、我が人生に悔いなし」と閉じています。

新人の語り部として、限られた時間内で何を語り、何を子供たちに語り継げるのか、緊張しながら頑張っています。

語り部講話の聴講者を募集しています。
対象は10名以上の団体で、事前申込が必要です。
詳しくは資料館ホームページをご覧ください。



語り部講話の感想

イタイイタイ病の辛さや苦しさを改めて知りました。これからも環境を大切に、美しい自然を守るためにできることをしていきたいです。

(小学生：女子)

実体験を語る人がこれからどんどん少なくなっていくだろうけど、自分たちが少しでも今日の話の内容を伝えていきたいと思います。

(20代男性)

語り部さんの悲痛な思いがにじんでいました。講話を聴いて改めてイタイイタイ病が昔の問題、話ではないんだと実感しました。

(20代女性)

